

末にその解説があつてまことにゆきとどいてゐる。

(第三卷 菊判本文六七五頁・索引年表等三一頁昭和四三年一〇月刊・第四卷菊判本文七四一頁・索引年表等三一頁昭和四四年一〇月刊何れも学芸書林発売 定価各二、八〇〇円)  
(村田修三)

F・レーリヒ著  
瀬原義生訳

## 中世の世界経済

中世の商品流通が、当時としては可能なかぎりの広い「世界」を一つの経済体制に組み入れ、そこでは高級な贅沢品だけでなく、大衆的な一般消費物資も大量かつ広範に取引され、とうぜん商人層こそこの「世界経済」の主導者であつたとして、ビュッヒャーの「都市経済」概念を完膚なきまでに批判したのが、レーリヒのこの名著であることは、こと新しくことわるまでもないであらう。昨今の歴史書翻訳ブームのなかとはいへ、いまさらビュッヒャー批判でもあるまいと考えるむきもあるかも知れない。しかし中世経済について流通部門への関心が相対的に稀薄で、しかも理論の硬直化、

あるいは硬直した理論の横行を許しやうしい体質をもつわが学界では、やはり歓迎されるべき訳業の一つといつてよい。

本書の内容に対してもさまざまな批判がありうる。訳者も解説(二二二頁)で若干の論点を指摘しているが、そのほかにも、たとえば、毛織物その他の商品について中世遠距離商業の対象になったのが贅沢品だけでないことを強調しながら、第四章「需要充足にあつた消費者の態度」では、「リューベックのある都市貴族」や皇帝フリードリヒ二世や「ウーブランド地方のある立派な指導的人物」といった上層階級の贅沢品への強い欲求の実例を評述し、しかもそのうえで「あらゆる世界からくる品物に対する」「一般消費大衆の衝動」を説明する、そういう論証の進め方には疑念が残らざるをえない。たとえそれが、史料的にないもの、ねだりであるにしても。

原著は講演を印刷に付したもので、語学力に自信のない私などには読みやすいものではない。「逐語訳にとらわれず、原文の意味するところを正しく伝える」と意図された訳文は、おおむね平明である。訳者の労に敬意を表したい。ただし *Hinterinden*

を「インド輿地」(二二六頁)と訳するのは乱暴だし、*Kaufmannschaft* は「商人団体」ではなく、やはり「商業」ないし「商人活動」とでも訳するのが妥当ではなからうか。

またブレイメンのアダムという男の「怪世からの言葉」(六五―六六頁)はむしろ「警世の句」であり、絹織物工業をフランスに移植しようとの試みは、「すべてのひとから期待されていた」(七九頁)ではなくて、「子期以上にうまくいった」のではないか。一四七八年、大ラーフェンスブルク商会在、当時ドイツ自体でスペイン向けのバルヘントが十分に入手できなかったからであつて、「ドイツだけで満足せず、スペインの国中をバルヘントで充滿させた……」(四二二頁)というのは適訳とは思えない。ことに、「消費者側のせまい範囲……」(三二二頁)とか、「飲み食いについては、法外なものに對する欲求はおさえられていた」(三三三頁)とか、「ロマンチックな精神とはおおよそかけはなれた経済理論」(八七頁)とかの箇所は、私の理解とはおおよそ正反対の意味になっている。なお、二四頁のリューベック市場での毛織物取引のくだりも、訳文とはち

がついて、その規模の大きさから見て、Ge-wandschneiderなる語にまつわる矮小な諸観念とは全く無縁であると、レーリヒはいつているではなからうか。私の読みちがえであれば、むしろ幸いである。

(B6判一二六頁 昭和四四年二月末来社刊「社会科学セミナー」定価三八〇円)

(川口 博)

Jean Gottmann:

## Essais sur l'aménagement de l'espace habité

メガロポリスの著者ゴットマンの論文集。「生活空間の整備に関するエッセー」と題し、著者が各種の雑誌等に発表した論文十八編を整理して一冊の本にしたものである。全体を三部に分け、序文、序論と結論をつけ加えて、序文、序論と本文四部からなっている。序文では「整備に関する現在の配慮」と題し、現在では生活空間の整備が重要になってきていることを力説している。序論は「法律と地理学—空間の利用者のためにどのように空間を整備すべきか」と題していることから分るように、空間を最

もよく整備するために地理学と法律の果すべき役割を説いたものである。序論とはいえ、二十二頁にも及ぶもので、独立論文のような形をとっている。第一部は「整備の一般理論の要素」と題し六章からなっている。すなわち「空間の組織化について—地理学と経済学の考察」、「政治と具体的事実」、「人文地理学の分析方法について」、「海と土地—政治地理学草稿」、「灌漑」、「地域計画化の研究」の六論文で、とくに第三章の「人文地理学の分析方法について」は「地理学年誌 Annales de Géographie」に掲載された論文で、生活様式批判を行なった論文として有名なものである。第二部は「都市化と整備」と題され、五章からなっている。すなわち「都市の拡大と人口移動」、「現代世界における都市化とその政治的帰結」、「北アメリカ・西ヨーロッパの都市化」、「大西洋兩岸の都市の計画」、「ペリの計画についての論争」の五論文で、都市化に伴う整備計画について論じたものである。第三部は「アメリカの経験からの教訓」と題し、七章からなっている。すなわち「アメリカ合衆国の発展と戦後の経済」、「アメリカ合衆国の人文地理学における構

造の変化」、「アメリカの発展の傾向」、「アメリカ政府の農業事業」、「近代農業発展の政策的反響」、「メガロポリス—近代都市化の地域—実験室」、「ケネディーのアメリカ」の七論文で、ゴットマンが一九四二年合衆国を旅行したのをきっかけに、アメリカ合衆国に関心をもつようになり、その後メガロポリスをはじめとしてアメリカ合衆国の研究を進めていった成果を示す論文を集めたものである。第四部は結論であるが、「環境の整備技術」と題しており、八頁に及ぶもので、環境の複雑さ、空間の整備問題を論じている。表題からも分るよう

(1966, mouton & Co., 347 p.p., ¥ 1980)  
(青木伸好)